



線描画の難しさは、できるだけ細い線を描くことですが、「同じような濃さ、細さにするコツを掴むと簡単。線を何度か重ねていくと、絵の表情が変わってくるんですよ」と線描画の魅力を語る布目さん。描きたい場所の写真にマス目を引き、倍率を計算して画用紙に描いていくという手法ですが、「気がつくと4、5時間経っていてびっくりすることがあるんです」と屈託のない笑顔を見せます。根気のいる作業だけに、書道教室の受講生の中で、線描画を描いたのは布目さんただ一人でした。

「野田かるた」をとおして まちの魅力を再発見

書道教室と時期を同じくして、放送大学に通い始めた布目さんは、体育の単位取得のためレク・カレッジ受講後に、NPO法人野田レクリエーション協会に入会。それが縁で現在は当会の事務局長を務めています。平成19年2月に協会が創立10周年を迎えるにあたって、式典の記念品として「野田かるた」を製作することになりました。

「野田かるた」は、読み札、絵札ともに44枚で、「う」美しい緑を残す野田の街「ろ」路地から路地へ走る豆バス市民の足など、市内の名所や旧跡、祭りなどをテーマにしています。読み札は、会員たちが知恵



を絞り合
つて考え、絵札
は布目さんがすべて水
彩で描きました。

「野田かるたの中で気に入っているのは、利根運河と土手など、自然の風景です。かるたの図案を考える際に、いろいろな本を調べたり、現地へ行ったりしているうちに、市内にはこんなに美しい場所や自慢できるものがあることにあらためて気づきました。

野田に20年以上住んでいますが一歩の魅力は人とのつながりです。地域の人たちと交流しながら、次世代に伝えたい野田の美しい風景を描き続けていこうと思っています。例えば、玉葉橋から見える《ダイヤモンド富士》も自慢のひとつ。ぜひ描いてみたいですね」

目標が決まると、途中でやめたいのが布目さん流。書道教室の友人から「三人展」を開催しようかと誘われていたこともあり、いつか実現したいと夢を膨らませています。

小筆の先端5mmを使って、細い線を描いていく